

Title	アリストテレスにおける徳の教育と経験について：道徳性の発達と習慣形成の役割から
Sub Title	Virtue ethics and education in Aristotle
Author	東, 敏徳(Azuma, Toshinori)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2000
Jtitle	哲學 No.105 (2000. 12) ,p.137- 154
JaLC DOI	
Abstract	The revival of virtue approach to ethics has been accompanied by a concern with the notion of community. The wide spreaded assumption of a link between community and virtue may be due to Aristotelian roots of virtue ethics. Aristotle emphasizes the fundamentally social notion of virtue which is the way in that particular forms of life are linked with particular virtues. I wish to explore some of the possible links between virtue and social life. Especially I wish to indicate the relation between Virtue and experience which people acquire in a social life. Εμπειρία, experience is key term in order to understand the fundamental framework of Aristotelian way of thought especially about education. Because εμπειρία gives the each person the understanding how to behave in each circumstance. First, I wish to suggest the difference which was made by Aristotle between ηθικης virtue and διανοητικης virtue and then to argue the role of εμπειρία, experience, in the acquiring of virtuous life, especially in order to make people progress from ηθικης virtue to διανοητικης virtue. And finally I conclude that εμπειρία, experience, in Aristotelian moral philosophy is important in moral education in order to make people virtuous.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000105-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

アリストテレスにおける徳の 教育と経験について

—— 道徳性の発達と習慣形成の役割から ——

— 東 敏 徳* —

Virtue Ethics and Education in Aristotle

Toshinori Azuma

The revival of virtue approach to ethics has been accompanied by a concern with the notion of community. The wide spreaded assumption of a link between community and virtue may be due to Aristotelian roots of virtue ethics. Aristotle emphasizes the fundamentally social notion of virtue which is the way in that particular forms of life are linked with particular virtues.

I wish to explore some of the possible links between virtue and social life. Especially I wish to indicate the relation between virtue and experience which people acquire in a social life. *Εμπερία*, experience is key term in order to understand the fundamental framework of Aristotelian way of thought especially about education. Because *εμπερία* gives the each person the understanding how to behave in each circumstance

First, I wish to suggest the difference which was made by Aristotle between *ἠθικῆς* virtue and *διάνοτικος* virtue and then to argue the role of *εμπερία*, experience, in the acquiring of virtuous life, especially in order to make people progress from *ἠθικῆς* virtue to *διάνοτικος* virtue. And finally I conclude that *εμπερία*, experience, in Aristotelian moral philosophy is important in moral education in order to make people virtuous.

* 聖徳大学幼児教育専門学校（教育哲学）

はじめに

今日アリストテレス倫理学に対する再評価はイギリスを中心に深まってきた。この再評価の背景には英米におけるアリストテレスについての文献的調査の深まりがある⁽¹⁾。ここにおいては道德性に関する教育の役割が注目されている⁽²⁾。またこの新アリストテレス主義の中には、次の共通点を見ることができる。それはアリストテレスの考え方の特徴である、社会的な道德性を強調し、その見直しをはかろうとする点である⁽³⁾。

この点は今日の道德教育における知と徳の乖離の問題、すなわち、道德を教える際に生じる、知ることと行うこととに関ってくる。本稿ではアリストテレスの知と徳の関わり——これは再評価の中でさまざまな角度から論じられている——を吟味する。また特にアリストテレスが徳の習得に際して経験を重視したことに着目し、それを位置づけ直すことから、アリストテレスの論を評価する。これは行為することにより学ぶというアリストテレスの主張の中で、経験が持つ役割を明らかにすることにある。すなわち、行うことが知ることとどう関わるかという問題を経験の働きから示すところにある。そしてそこから、道德教育における知と徳の関係を示すことを目的とする。

I 問題の所在——アリストテレスにおける徳と知

アリストテレスの考え方はそもそもソクラテスへの批判、徳は知である、に対するところから始まる。ソクラテスは徳を知であると位置づけ、徳に反した行為をするのはそれを知っていないからであるとした。これに対し、アリストテレスは知的な *διάνοιας* 徳と、倫理的な *ἠθικῆς* 徳とを区別することで⁽⁴⁾、知ってはいるが行為につながらない場合があると反論をした。

アリストテレスの言う倫理的な徳とは、ある状況下でふさわしい特定の

行為をとることを可能にする徳である。しかし、これはその人が一定の状況に対して一定の行為を適切であると認識していることを示してはいるが、その行為が何を目標としているかの包括的理解を持っているところまで含意してはいない。これに対して、知的な徳は、自分の行為についてその正当性を体系的に裏づけうることを含む。なぜその行為をするのか、その行為の理由は何か、またその行為の目的は何かという体系的な理解を含む。

この両方が「善き人」たる条件を規定する。ここで、アリストテレスは知的な徳と、倫理的な徳の卓越性、*ἀρετή*の両方を道德に必要なものとしている。「徳は目標をして正しきものたらしめる役割を果たす。⁽⁵⁾」しかし、目的を達成するためにも、また為されるべきことを洞察するためにも、まず知的能力が必要となるが、知それ自体も倫理的徳によって支えられていなくてはならない。「倫理的な徳なくしては知慮ある人でありえないことは明かである。⁽⁶⁾」ここで、アリストテレスは特定のふさわしい行為をすることが、知的理解とともに善き行為に必要なことを主張している。ここから、望ましい形で確立されている道德性には二つの条件が必要であることになる。一方に何が道德として正しいかふさわしいかについての知が必要である。他方に、その知を実践するための行為性向を持っていることが求められる。「正しいこと、高貴なこと、人間にとって善きこと、これらはいずれもそれを行うことによって善き人間の善き人たる由縁となるのである。⁽⁷⁾」以上、アリストテレスが知と徳を分け、それぞれの役割を規定したことをまず指摘しておかなくてはならない。

続けてアリストテレスは言う。「私たちは徳を行う力を、徳を知識として持っていることによって得るわけではない。徳とは状態なのである。それはちょうど健康さや、強壮さの場合に似ている。私たちは医学や体育学の知識だけによってそうしたことを行う力を得るわけではない。⁽⁸⁾」上の引用はアリストテレスが徳をそれに対応した行動の実践を通じて獲得され

るとした点を示している。しかし、これを、まず行為があり、その後で知識が得られると考えるならば、シャーマン N. Shermann の指摘するように次の問題を残す⁽⁹⁾。すなわち、アリストテレスを知と徳の分断のもとに解釈することは、習慣形成による徳の習得から行為する初期の段階と、知的判断による行為の決定に基づいて行為する高次の段階との間に不連続な移行の瞬間を残すことになる。(確かにアリストテレスは知的な役割を果たす部分 *to logon echon* と、そうでない部分 *to alogon echon* とに分ける指摘をしている⁽¹⁰⁾。しかし、この区分はアリストテレスにおいては相互関係にあり、*to alogon echon* には知的な部分に参与することも指摘している⁽¹¹⁾。)であるなら次の段階へと成長していく際の仕組みそのものをアリストテレスがどう考えていたのかの解明が求められてくる。

実践的な判断ができるためには習慣形成を経て、知に基づいた自律性へと進むことが必要である。この変化の契機と仕組みについてアリストテレスは十全な道德性に必要な、合理的な部分の卓越性と、行為や性格の卓越性の両方から説明している⁽¹²⁾。これは有名な、人は実践的な英知なくしては善たりえないが徳なくしては英明たりえないという主張に示されている。

ここからアリストテレスの知と徳の関係を明らかにしようとする本稿の目的からして次の順で進めていくことが必要となる。まず最初に以下、アリストテレスには倫理的成長に関する発達段階の考え方があることを示す。その中で道德性の形成に関するアリストテレスの論の中にある発達を促す仕組みも提示される。続いて習慣形成により得られる経験が単なる機械的反復ではなく、探求であると同時に試行錯誤を通じて実践的判断を鍛えていく経験でもあることを示す。これにより、最後に経験が徳の形成を促す仕組みが明らかになる。

II アリストテレスの発達論と徳の習得

アリストテレスの発達モデルを説明するためにはアリストテレスの子ども観から明らかにしていかななくてはならない。子どもと対比し、成人の持つ能力としてアリストテレスはフロアイレーシスという選びの能力をあげる。この成人の持つ能力の欠如から子どもの道徳性の不十分さが生じてくるとアリストテレスはする⁽¹³⁾。それは例えば、要求を抑え、コントロールする判断の能力や⁽¹⁴⁾不適切な喜びを求めるところに⁽¹⁵⁾違いが示される。

まず最初に発達についてアリストテレスは初期の段階をあげる。例えば、生理的な欲求が幼児期における行動起因の主たる源泉を占めるように、初期には食物摂取の欲求、睡眠や身体的快適さへの欲求が行動の起因となる。そこではまだ人間は直接的な外界との関係に即して行動パターンを決定している。もとより、ここには他の要因、他者への思いやりや将来のより大きい快を求めて、現在の快の追求を控えるなどの配慮が次第に含まれてはいく。しかしなお、その配慮は行動決定の中心的要因とはなっていない。アリストテレスは言う、「徳に即して活動すること⁽¹⁶⁾」のできる「性質の人間に、すなわち、善き人間、うるわしきを行うべき人間に⁽¹⁷⁾」なることは目的であるが、「動物は総てこのような性質に与ることはできない。同じく、子どもはその年齢ゆえに、このような性質の働きをなしえない。⁽¹⁸⁾」なぜなら、「子どもは未だに欲求に従い生きている⁽¹⁹⁾」からであり、それは成長のために「子どもがその指導者に即して生きることが必要であるのは、魂の欲求的な部分がことわりに即していくことが必要なのと同じである。⁽²⁰⁾」子どもは適切な指示を外部から与えられることにより、ことわりに即して生きていく仕方を身につける。

これに続いて中間的な段階がある。アリストテレスは行為が知識に先立たなくてはならないとして言う。「人は建築することによって大工となり、

琴を弾くことで琴弾きとなる。同じように、もろもろの正しい行為をなすことで正しい人となり、諸々の節制的なことをなすことで節制のある人となる。⁽²¹⁾」このような善き習慣として身につけられた実践的な活動や、人生の中での現実の実際体験の獲得が中間的な段階の特徴をなす。「年齢の若いものは経験に富んでいない。なぜなら、長い年月をかけて経験は作り出されるからである。⁽²²⁾」それだけに「若い年齢のころから、徳に即して正しく導かれる⁽²³⁾」ことは重要である。「若い年の時代に正しい育成や訓練を受け、……またその学んだ教訓を実践し、それを習慣としていくことを必要とする。⁽²⁴⁾」これにより、自らの欲求を過剰に過ぎることなく、過小に陥ることなく、中庸に制御できるようになる。この段階では初期の段階にあったような、ただ単に欲求的な働きに従ってはいない。加えて、対立する欲求の葛藤などを通じて自分の欲求の秩序づけを行うようになる。それにより、自分の行動の理由について把握し、行為の当事者として後に述べる核となるものを作っていく。

この徳の形成に必要となる行為は次のような特徴を備えた行為でなくてはならない。分析論後書でアリストテレスは帰納モデルが道徳的発達モデルとしてとられるべきことを指摘している。帰納のための最初のデータはそれぞれの知覚である。個別の行為の知覚が道徳的な状況の中で与えられる。ついで、帰納という一般化の中で経験が構成されていくという安定化の段階が続く。道徳的発達も同じように発達の一過程の中で徳が形成されていく。これをアリストテレスは次のような比喩で表現している。「それは戦いの敗走の中でまず一人の男が立ち止まり、次の者が続いて立ち止まり、やがて戦列が立て直されるようなものである。このようなプロセスで魂は形作られていくようになる。⁽²⁵⁾」特定の状況の中での行為は、行為の具体的結果についてのデータを与える。また同時に実際の行為はその行為が与える満足感などの経験も残していく。

ここで後の段階における基礎ができる。行為を習慣とすることは子ども

が単にある一定の行為をするだけではない。この特定の行為を行うことでどのような帰結が生じるか、逆にしないとどうなるかを知る。すなわち、状況に対応し、そこで何をするか、またしないか、その結果どうなるかのデータを集めているのである。すなわち、行為の引き起こす影響やさまざまな条件を考慮に入れた上で何が最善かを判断する際の材料が集まる。

これにより、正しい行為への条件、すなわち、為すべき理由の理解が整えられてくる。すなわち「習慣づけによって耕作されてある……種子を育む土壌 *τὴν θρέφουσαν τὸ σπέρμα*⁽²⁶⁾」ができてくるとアリストテレスはする。いわばこの段階において次の段階に至るための材料が蓄えられいくのである。

ここにおいてアリストテレスが考える最後の発達段階が示されてくる。すなわち、道徳性の発達においてフロニモスという、道徳性を十分に認識し、かつ納得した上で道徳的行為それ自体に喜びを感じるという段階が示されてくる。すでにこの段階に先立つ中間的段階で、行為が引き起こすさまざまな他者への影響や、その行為を行った帰結についての理解が与えられている。この理解が行為の正しさ、確実性から裏づけられることで、さらに行為への性向を確実なものにしていく。またこの理解は自律的な立脚点を与える。この段階では「徳を、……第一には、知識の上に立って、第二には、その行為をそれ自体のために選択し、さらに第三には、その行為を自己の安定した定常的な状態で行っていることが必要なのである。⁽²⁷⁾」ここにおいて、確立した徳と十分な知を伴って行われる行為へと至る、発達のプロセスが見られる。すなわち、本能的生存欲求により行われていた行為から、社会的政治的制度のもとで法律や規則に一致しようとして促された行為を経て、自律的行為に至るプロセスが示されるのである。

この段階で得られる自律性は前段階での習慣形成から生じる。しかし、この習慣形成に際して得られた経験は先に述べた核となる経験でなくてはならない。すなわち、戦列の比喩で記述されるような経験であり、自律的

段階を形成していく経験である。なおこのアリストテレスの主張には内的な能力と、その発達促進に影響を与える経験をもたらす環境との両方が関わる⁽²⁸⁾。

ではこの経験がなぜ、行為の発達を促す契機となるのか。促すために、経験はどのようなものでなくてはならないのか。これを示すために次に、アリストテレスの言う経験の役割を技術や徳の習得と関連づけて示していかなくてはならない。

III 経験 *εμπειρία* について

徳の形成を、経験から構成されていく発達のプロセスの中で捉える。今までこの視点からアリストテレスの論をみた。それだけに徳の形成に際して経験の獲得から構造的変移がどう起きるかを確認することが必要となる。経験の中から帰納的に知識が形成されるとするアリストテレスの考え方に従うならば、経験を獲得することで生じる認知の仕方の変移と、判断のための内的な構造的変化の解明が求められてくる。この内的な構造と経験との相関において、初期の欲求の段階から習慣の徳の段階へ、習慣の徳の段階から自律的判断の段階、すなわちアリストテレスの言うフロニモスの段階へと、段階を進んでいく原動力があるはずである。アリストテレスはそれについて言う。「実践の領域にあっては……習慣づけに基づく徳が本来の根源的な原理 *αρχήν* を正しく見いだすように示す。⁽²⁹⁾」すなわち、習慣づけ *ἡθισμος* が習慣の徳の段階へと子どもをすすめる。そして形式的な教示 *διδασκολίας* がさらに次の段階へと進める。「知的卓越性はその発生も成長も多くの部分教示におう。⁽³⁰⁾」この発達過程の頂点に位置づけられるのがフロニモスである。「フロニモスの特徴と考えられるところは、自分にとって善きこと、ためになることに関してふさわしい仕方、思慮しうるところにある。⁽³¹⁾」ここで言う「ふさわしい仕方」とは「人間的なさまざまな善に関してことわりを持ち、その真を失わない⁽³²⁾」仕

方である。すなわち、「どのようなことが全面的な面からみて善く生きるということ *εὖ ζῆν ὁλως* のためにいいか⁽³³⁾」を知る人である。そして同時に人をして、この状態へと導くのがフロニモスである。なぜなら、「すべてうるわしい状態へと導くことは……誰かにできるとすれば、その識者によって始めて可能であるからである。⁽³⁴⁾」

このフロニモスは発達ダイナミズムの中に育まれる。それは個別の行為のうちから得られた経験が習慣を通してより包括的な知に変化していくというプロセスでもある。これをアリストテレスは魂の目 *ὄμμα τῆς ψυχῆς* という比喩で言う。その目が働くためには「知慮と……徳を欠くことはできない。⁽³⁵⁾」フロニモスは魂の目を持つ人であり、この目は経験により洗練されていくことで、より正確なものになる。

ここでフロニモスへと人々を導いていく経験とは徳の形成のきっかけとなる経験でもある。それだけに、魂の目を洗練する経験の働きを示すことが発達に関わる経験の役割も示すことにつながる。

この経験とは具体的行為と遊離した言説とも、感覚的刺激から生じる個々に分断された経験とも異なり、個別との関係を保持しつつ、普遍化へ向けての強い傾向性を帯びる経験でなくてはならない。先の比喩で言えば、ちょうどまず最初に立ち止まる一人の兵士にこの経験が当たる。後の経験がその回りに集まってくる中核をなす経験である。そしてこの中核をなす経験はそれ自体が回りに他の経験を集めてくるだけの意味を持つものであるはずである。フロニモスに至るにはこの点で核となる個別としての経験を持ち、かつその行為を中心に他の経験を集め、そこから行為の理由を導き出していくという普遍の両方を必要とするのである。この両方を持つことで魂の目は洗練されていく。ここにアリストテレスの強調する経験の役割がある。

ではこの経験は倫理的な徳と知的な徳とを橋渡しする際にどのような役割を果たすのか。アリストテレスは、子どもは後に詳述するフロアイレー

シスをできないと断定している。だがこの断定を子どもが全くフロアイレースから隔絶されているとまではしていない⁽³⁶⁾。すなわち、ある程度の因果関係や目標達成の判断というものは子どもは自発的選択としてできる。子どもに欠けているのは状況の全ての面を考慮するという能力である。これは評価、関連する要因の考慮、優先性、互換的な手段への配慮を含む。このような能力は成長した人々の持つ対話的な推論能力を必要とする。また充実した良き生がどのようなもので、なぜよいかという正当立証も必要となる。そしてこの飛躍のための能力の耕作が必要になる。

このためには子どもが複雑な選択決定をするという機会を得られた経験が後の発達を促す。ここで得た経験は子どもが単に行動パターンを身につけるだけで得られたものではなく、環境に反応し、自ら意志決定を行った結果得られるものである。たとえ反省的評価や精緻な正当立証がなくとも自発的判断、意図的決定がそこにはある。このような能力は成長と共に発達していき、さらに複雑になってくる。

この経験は次のような行為から得られる。まず「行為は習慣から為される。なぜなら人はそれを前から何度もしているからである。⁽³⁷⁾」反復を通じて獲得された能力は自然の、ほとんど第二の天性になる。「なぜなら習慣になることでほとんど本性になる。習慣とは自然に似ている。しばしば生じることは常に生じることに似ており、自然の出来事は常に生じるのであり、自然の出来事も頻繁に反復されるのである。⁽³⁸⁾」ここでアリストテレスは習慣が人間の行動の本質的部分を作りあげるとしている。反復が一定の変化をもたらし、次第に行動が形成されるようになっていく⁽³⁹⁾。徳も同様に習慣から形成される部分を含む。しかし、徳の習得に際しては単に機械的に繰り返される同一の反応という能力とは対照を為すものであり⁽⁴⁰⁾、徳は認知的情緒的能力に関わってくる。

「倫理的な卓越性はまずそれをすることによって習得される。それは技術の場合に似ている。なぜなら技術を学ぶためにはその生産を通じて学ぶ

ことになるが、徳も同様である。大工は家を立てることによって大工となるのであり、豎琴弾きは豎琴を弾くことで豎琴弾きになるのである。勇敢な徳は勇敢な行為を通じてそうなるのであり、節制は節制した生活を通じてなるのである。……すなわち、一言で言えば、それに対応した行為をすることから形成されてくるのである。⁽⁴¹⁾

しかし、行うことによって徳が形成されるという言い方はいまだ不十分である。この中に行うことを通して魂の目が洗練され、徳につながるメカニズムが明示されなければならない。行動は状況認識を必要としているし、その行動に伴う情動や、どのようにまた、何の目的に向かって人は行動すべきかという信念や欲求についても関わってくるからである。

この点はアリストテレスの主張にある経験の反復という点の重要性に関わる。経験の反復とは全く同じ行動を何度も同様に繰り返すことを意味するだけではない。そこには反復に際してそのたびごとに熟考が入っているはずである。まず第一に、完全に同一の全く変わらない行動というのは現実の私たちの生活の中には有り得ない。その時の条件、発生経緯、行動の仕方、行動主体の変化などさまざまな面で違う。例えば、アリストテレスの言う正しい行為は単なる全くの同一の対象、人物、状況の中での繰り返しを否定している。

第二に、たとえ、単一的反復的繰り返しという単純作業のプロセスにしても、人がそれを改善しようとするならば、全く同一の作業にはならない。なぜなら、もし全く同一ならば、進歩や向上の余地はないはずだからである。技術の進歩はその技術の目的となっているある理想への接近が前提となる。反復を通じての学習は進行的な試行であり、理想の状態に近づいていくように少しずつ変化していく。この試行的な試みにおいて必要なのは目標に対する意識である。すなわち、いかに目標に近づいているか、または逆にいかに遠ざかっているかという測定が重要となるのである。ここでの実践は単なる同一行動の反復ではなく、試行的な過程を通じての行

動の精錬化なのである。

ここで重要となってくるのは反復が批判的である程度に応じて実践も進展していくというところである。この進展のためには、目標の正確な認識、失敗の確認、指導についての理解、適切なこつに従うことなどの批判的な過程が含まれてくる。そしてこの際にさらに重要な役割を果たすのが理想の状態を示すモデルである。

アリストテレスは言う。リラを弾くことを学ぶときにはただたんに反復するだけではなく、熟練した人の例を参考にして行う。そしてそのモデルにどの程度近づいているかで自分の練習成果を判断している。熟練した人の手引や、模範例なしでは生徒はすぐに悪いリラ弾きになってしまう⁽⁴²⁾。模範例を持つことは、学習者にその模倣例を自分の持つ技術と比較することを可能にする。それが技術の習得に際して彼我の認識へとつながる。

IV 経験と徳の形成

この技術の習得プロセスに比して、徳の習得はより複雑である。徳に関する判断には多様な状況の認識、上位の目的との比較の上でどう行為するか決定が含まれてくる。ここで必要なことは洗練されたモデルに従うということである。それにより、必要な状況認識が生じ、判断の技量が向上する。それとともに個別の状態がどのように関連しているかについての幅広い洞察も与えられてくる。

アリストテレスは徳の習得と技術の習得を比較して言う。「さてまた技術の場合と同様に同じ原因や手段が徳を生み出すときもあれば、それを破壊することもある。それはリラを弾くことから上手なリラ弾きになったり、下手なリラ弾きになったりする。建築家や他もまた同様である。人はよく建築することでよい建築家になり、貧しい建築をすることで悪い建築家になる。だからこそ師という役割が必要となるのである。⁽⁴³⁾」師を前にすることで、リラをただ持続的に練習するだけでなく、習熟者の演奏に耳

を傾け、自分の演奏がどれだけそれに近いかに注意を向けることができる。しかし、技術と違い、徳においては行動をその目的から分離することは難しい。技術では生み出されてくる結果、例えば、演奏、建築が主だが、徳においては徳ある行動そのものが主となる。

確かに、アリストテレスは徳のある人となるためには、徳のある行為を為すことによって可能になると規定した。「人は正しい行為を行うことによって正しい人となり、節制的な行為を行うことによって節制的な人となるということは自明である。このような行為をなさずにいては善き人となるための機会を誰も持つことはできない。⁽⁴⁴⁾」しかし同時に、道徳的行為とはただ単に最終的な行為に示された結果だけで判断されるのではなく、自覚、すなわち、行為がそこから生じてくる認識によって徳があるかどうか判断されなくてはならない。「善き行為をなす人が一定の仕方において、これらの行為をしていることが必要である。……すなわち、第一に知識の上に立ち、第二に、行為を自ら選んで、第三には、安定した自己の状態に基づいて⁽⁴⁵⁾。」すなわち、徳のある行為は十分自覚して行われなければならないのであり、それ自体のために十分熟慮の上、選びとられた、そして確立された心的状態の上に為されなくてはならないのである。すなわち、アリストテレスは人間が十全な意味での倫理的状态にあるためには、倫理的行為について適切な知識を持つと同時に、その知識自体⁽⁴⁶⁾が相応なふさわしい状態によって支えられ、維持されていなくてはならないとする。(この点が技術と違う。技術では習得している技術を故意に誤用することもできる。例えば、わざと未熟な演奏の真似をするなどがある。しかし、徳を故意に誤った形ですということとはしない。)それは徳の何たるかを心得て体現している人、フロニモスにおいて示される。

ここで改めてフロニモスにおける徳のあり方を示すことが発達のプロセスを示すことになる。フロニモス *φρόνιμος* とはフロネーシス *φρόνησις* のある人と同義である。フロネーシスすなわち実践知は、プロアイレーシス

προαίρεσις, 選択において示される。選択とは事物の考察や思量を通じて選択肢について優先順位を設定し、取捨選択の結果、直接に行為の起因となるものである。すなわち、ある行為を追求するか、また逆に回避するかを決定し、その決定が直接行動につながるような働きを意味しているのである⁽⁴⁷⁾。

フロネーシスにおいて重要なことは、選択が知的な働きでありながら、同時に行為の直接的な起動力という役割を与えられている点である。なぜなら、選択と願望 *βουλεύσις* が共通点を多く持つとアリストテレスはするからである。

両者は異なるところもある。まず第一に選択は私たちの力の及ぶ範囲内にあるものにのみ関わる。言い換えれば、実現可能なものにのみ関わる。これに対し、願望は実現不可能な事、例えば、不死も願う。第二に、願望は目的の設定に関わるが、選択は目的の設定と同時に目的へ向けての手段の発見や確定に強く関わるという違いがある⁽⁴⁸⁾。

以上のような差異は持つが、願望は選択と同様、欲求であるという点で人間の行為を促すとされる。願望は目標を設定し、行為を促進していく働きを担うが、願望だけではその目標を実現していく手だてまでは決定することはできない。ここにおいて、選択が行われることになる。すなわち、目標の実現に向けて手段の発見、検討を行うのが選択であるとされる⁽⁴⁹⁾。

このフロネーシスを得るためには、すなわち、徳の習得のためにはアリストテレスは行為の持つ認識的な作用を強調する⁽⁵⁰⁾。アリストテレスは学ぶ際に習熟の重要性を述べる。「ある主題について初めて学んだ者は言葉を順につなげるだけであり、まだそれを知ってはいない。なぜなら知っているためには身についていることが必要であり、それには時間が要する。⁽⁵¹⁾」すなわち、道徳的発達に際して、完全には理性的ではない状態の中で過ごす、習得のための時期が必要となる。

ここには徳の発達が環境との相互作用によるとする考え方が示されてい

る。なぜなら、環境はミメシス、模倣の材料となり、習慣形成の手本となるからである。人間の成長の初期には模倣という行為そのものが喜びを与える。子どもが大人の真似を好んですることはよく知られている。同様に、ミメシスによる知的喜びは徳の発達にも必要である。なぜこのようなことをしなくてはならないか、なぜこうすることが一般的な倫理的要求に一致するかを理解することは知る喜びをもたらす。それにより特性も発達していく。すなわち、環境との相互作用の中で十分に自覚できなくてもフロニモスとして過ごす時間を子どもは持つことになる。

徳を行うことは同時に喜びをもたらすとアリストテレスはする。理解することは喜びであり、「最善の活動とは……最も究極的で完璧な活動であるだけでなく、またそれは最も快適な活動である。⁽⁵²⁾」それはアリストテレスの言う幸福、よく行うこと、*eúdaimon* につながる。徳の活動もまた喜びを与えるものであり⁽⁵³⁾、それだけに徳の形成において十分に自覚的でなくてもフロニモスに近く行動することが重要である。そしてその時に得られた経験は大きな意義を持つ。この経験が選択材料を提供し、行動の起因となる。ミメシスにおいて得られる経験が発達のための力となる核としての経験として残る。この核の回りにさらにその後に得られる経験が集まる。その集まりは自己吟味のための豊かな対象となり、さらに後の判断の形成を育む。徳の習得に際しては知的な働きが重要であるとアリストテレスは言うが、その知的な働きを支える土壌としての経験が同時に大きな重みを持つのである。

ま と め

以上のアリストテレスの指摘は今日の教育問題を省みる時、示唆に富む。今日の教育問題においては子どものさまざまな問題行動が表面化してきているが、その原因として家庭教育における子どもの経験が指摘されている。この家庭で得られる経験が子どもにとり初期に得られるだけにその

経験の持つ後に与える影響は大きい。それがミメシスのもととなるからである。その経験が核となり、他の後に得られる経験にもつながり、さらには土壌として、判断にも影響してくるからである。この点を考える時、ここでは論じきれなかったアリストテレスの言う、教授 *διδασκος* についても解明していくことが今後重要となる。

註

アリストテレス著作の翻訳は Loeb Clasical Library をもとに高田三郎訳（岩波、『ニコマコス倫理学』）を参考にした。

- (1) 一例として, Kraut, R., *Aristotle on Human Good* (Princeton 1989), Bpoadie, S., *Ethics with Aristotle* (Oxford U. P., 1991), Nussbaum, M. C., *The Fragility of Goodness*, (Cambridge U. P., 1986) などがある。
- (2) 例えば, バーニェットにこの指摘は見られる。バーニェット M. F., 井上忠他訳『ギリシア哲学の最前線』（東京大学出版会, 1986）88 頁。またブローディは道徳的教育の重視を言う。Bordie, S., *ibid.*, p. 82.
- (3) Hudson, W., *Modern Moral Philosophy* (Macmillan 1983) p. 362.
- (4) *Ethica Nicomastica* 1144b19-30 以下, *E. N.*, と略す。
- (5) *E. N.*, 1145a5-6.
- (6) *E. N.*, 1144b31.
- (7) *E. N.*, 1143b22-24.
- (8) *E. N.*, 1143b24-28.
- (9) Shermann, N., "Habituation of character", *Aristotle's Ethics*, (Rowmann & Littlefield, 1999) p. 231. またシャーマンはこの理性的能力と習慣形成を二つに分ける立場が従来の立場であることを指摘している。
- (10) *E. N.*, 1102a26-31.
- (11) *E. N.*, 1102b28-1103a1.
- (12) *E. N.*, 1144b30-a3.
- (13) *E. N.*, 1111b8-9 1144b8.
- (14) *E. N.*, 1147b1-5.
- (15) *E. N.*, 1152b19-20
- (16) *E. N.*, 1099b25.
- (17) *E. N.*, 1099b32-33.
- (18) *E. N.*, 1099b34-1100a2.

- (19) *E. N.*, 1119b6.
- (20) *E. N.*, 1119b12-14. なお同様の指摘は次にもある。政治学 1260a34, 1260b3-8.
- (21) *E. N.*, 1103a34-b4.
- (22) *E. N.*, 1142a15-17.
- (23) *E. N.*, 1179b31-32.
- (24) *E. N.*, 1180a1-2.
- (25) *Analytica Posteriora* 2, 19 100a12-14.
- (26) *E. N.*, 1179b6-7.
- (27) *E. N.*, 1105a32-b1.
- (28) こどもの知覚、識別能力は初期からめざませられることをアリストテレスはしばしば指摘している。「子供が親を愛するのは時が経過し、ものわかりや知覚ができてからでしかない。」*E. N.*, 1161b28, しかし続いて知る喜びを子ども達も持ち、そこから発達の契機も生じる。「模倣すると言うことは子供のころから人間に備わった自然な傾向であり、人間は再現によって最初にものを学ぶ」詩学 1448b7-10 またアリストテレスは政治学の中で教育の意義を重視し、それは「次の段階へと目を向けることである。」教育はその視点を通じて多くの学習を促進していくことになる。政治学 1338a39-41.
- (29) *E. N.*, 1151a17-19.
- (30) *E. N.*, 1103a15-16. なおこの知的卓越性の徳は教示により促進されるという指摘は Hauskeller, M., *Geshichte der Ethik, Antik*, (dtv., 1997) s. 94. に強調されている。また Baumann は理由の理解は三段論法によることを指摘している。Baumann, R. W., *Aristotle's logic of education*, (Peter Lang, 1998) p. 74. さらに Höffe は三段論法を基礎とした討論により、より理論的な知が生み出されるとしている。Höffe, O., *Aristoteles*, (Beck München, 1996) s. 55.
- (31) *E. N.*, 1140a25-27.
- (32) *E. N.*, 1140b20-21.
- (33) *E. N.*, 1140a28.
- (34) *E. N.*, 1180b27-28.
- (35) *E. N.*, 1140a31-32.
- (36) 政治学 1260a13-14 「子どもは理性的な部分を持ってはいるが、未発達である。」
- (37) 修辞学 1369b6.
- (38) 修辞学 1370a6, 452a27.

- (39) *Etica Eudaimonian*, 1220a39b-3. および, 政治学 1332b1 参照.
- (40) *Etica Eudaimonian*, 1220b4, *E. N.*, 1103a20-23.
- (41) *E. N.*, 1103a31-b21.
- (42) *E. N.*, 1103b7-12. さらにこれはその所有者がそれを教えることができることにもつながる. だから技術を習得するということはそれを伝達できるということである. アリストテレスは技術の習得は単なる技術の所有とは異なるとしている. 形而上学 981b7-10.
- (43) *E. N.*, 1103b8-b16.
- (44) *E. N.*, 1105b9-11.
- (45) *E. N.*, 1105a30-34.
- (46) この自己自身に関わる知を自己関係的な「自己自身の存在を抱き込む知」として規定する主張がある. 岩田靖夫『アリストテレスの倫理思想』(岩波書店, 1985) 62 頁. 他の種類の知識, 例えば, 三角形の内角の和が二直角に等しいかどうかの知識, これらの知識は快や苦によって逆転されたりしない知識である. しかし, 為されるべきことに関する知識についてはその知を持つものの生き方が乱れていれば, その知は成立しなくなる. 「節度のなさは原則を見ることを妨げる. すなわち, このために, あるいはこれだから選ぶべきであり, かつ選んだことが何であれ, 行うことを妨げる. なぜなら, 悪徳は原則を解体するからである.」*E. N.*, 1140b1-20.
- (47) プロアイレーシスはアリストテレスの語源的説明によると, プロ, 先立つ, とアイレーシス, とる, との二つの語の組合せからなるとする. Joachim, H. H. はこのプロとは時間的優先のもならず, 目的の実現の手段についてその中の一つを他に優先して採用することも意味すると言う. Joachim, H. H., *Nicomachian Ethics*, (Oxford, 1970) p. 100.
- (48) *E. N.*, 1111b20-30.
- (49) プロアイレーシスについての本質的定義はニコマコス倫理学の 1112a13 に詳しく述べられている. しかし, ロスの指摘に代表されるように, プロアイレーシスは手段の設定に関わると同時に目的にも関わることは多く指摘されている. David Ross, *Aristotle*, (Routledge, 1971), p. 62.
- (50) バーニエット前掲書 94 頁.
- (51) *E. N.*, 1147a21-2.
- (52) *E. N.*, 1174b17-20.
- (53) *E. N.*, 1104b10.